

医史学者・思想家 ペドロ・ライン・エントラルゴ

泉 彪之助

日本医史学雑誌第四十九巻第三号
平成十五年九月二十日発行
平成十五年四月二十三日受付

日本医史学会総会で書店のコーナーへ行ったら、ペドロ・ライン・エントラルゴ (Pedro Lain Entralgo) の著書があった。“Historia universal de la medicina” (『図説医学の歴史』¹⁾) で、スペイン語で書かれているが、大判の書籍が七冊まとまった大著である。ライン・エントラルゴは、以前簡単に紹介したことがあるが、²⁾ 高名な医史学者であると共に、二十世紀後半のスペイン思想界を代表する碩学である。社会的には、マドリッド大学学長、スペイン王立言語アカデミー会長など、スペイン文化界の指導的地位にあった人でもある。

このようにライン・エントラルゴは高名な医史学者であり、著作のいくつかは邦訳されているが、スペイン語で執筆していることもあって日本ではあまり知られていない。医史学の著作が邦訳されたのは一冊だけで、しかも絶版になっていることも影響しているであろう。清水憲男氏の文を引用しながら紹介したい。³⁾

一、ペドロ・ライン・エントラルゴの経歴

スペイン人の姓は、父親の姓と母親の姓を英語の *name* にあたる *name* または *name* でつなぐのが普通で、通常父親の姓で呼ばれる。画家ゴヤの姓はゴヤ・イ・ルシエンテスであり、哲学者オルテガの姓はオルテガ・イ・ガセットである。大解剖



写真 1 ペドロ・ライン・エントラルゴ
文献 (10) より引用

学者ラモニ・カハール (Santiago Ramon y Cajal) も、ラモンが父親の姓、カハールが母親の姓だが、ラモンがよくある名前なので、しばしば母親の姓で呼ばれる。『脳の探求者 ラモニ・カハール』の著者萬年甫氏は、母親の姓であることを断りながら、慣習に従ってカハールと呼ぶとしている。⁽⁴⁾

ライン・エントラルゴも、ペドロが名、ラインが父親の姓、エントラルゴが母親の姓でないかと思われるが、母親の姓がエで始まっているため、イまたはエが省略されているのであろう。

ペドロ・ライン・エントラルゴ (写真1) は、一九〇八年二月十五日、スペインのマドリッドの東北東、テルエル (Teruel) 県ウレア・デ・ガエン (Urea de Gaén) で生まれた。マドリッド大学の化学科を卒業した後、マドリッド大学医学部に進学し、さらにウイーンに留学、帰国後、バレンシア県立精神病院の精神分析医となった。⁽³⁾

一九三九年、マドリッド大学で実験心理学を教えるようになり、一九四二年、三四歳でマドリッド大学の医学史正教授資格試験に合格した。三八歳、スペイン王立医学アカデミー会員、四三歳でマドリッド大学学長に就任した。一九五四年、スペイン王立言語アカデミー会員、一九六四年、スペイン王立史学アカデミー会員、一九七八年、医学史正教授を引退。一九八二年、スペイン王立言語アカデミー会長に選ばれた。⁽³⁾ その後の経歴は、資料を持っていない。

二、ライン・エントラルゴの業績

先に述べたような輝かしい経歴の基礎には、優れた学問的業績がある。彼の著述は多く、業績目録も入手していない

ので一部に過ぎないが、主として清水氏に従って、業績の概要をのべたい。

(一) 医史学の業績

(二) 人間学(清水氏は、Antotopologiaを内容からこのように訳している)

(三) スペイン論

(一) の医史学の業績は多数あると思われるが、正確な内容は不明である。清水氏によれば、医史学における最初の著述は“Medicina e historia” (『医学と歴史』) 一九四一、であるという。ラモニ・カハールの伝記も、少なくとも二冊⁽⁵⁾⁽⁶⁾ある。また(一)に分類すべきか(二)に分類すべきか分からないが、“Antotopologia médica” (『医学的人間論』) という著書もある⁽⁷⁾。

(二) について清水氏は、“La antotopologia en la obra de Fray Luis de Granada” (『フライ・ルイス・デ・グラナダの作品における人間学』) (注・フライ・ルイス・デ・グラナダは、十六世紀スペインの神秘主義詩人⁽⁸⁾)、 “La espera y la esperanza” (『期待と希望』)、“Teoria y realidad del otro” (『他者の理論と現実』)、“Sobre la amistad” (『友情について』)を挙げている。

(三) のスペイン論では、代表作は“La generación del noventa y ocho” (『九十八年世代』、邦訳題名『スペイン一八九八年の世代』⁽⁷⁾、後述)である。また“España como problema” (『問題としてのスペイン』、後述)も短い文章だが邦訳されており、この文章を含んだ同名の大著もあるという。“A qué llamamos España” (『何をスペインと呼ぶか』) という著述もある。

ライン・エントラルゴの特色は、医史学者であると共に、思想家であることであろう。著書訳者の一人佐々木孝氏は、「二十世紀後半のスペイン思想界を代表する」⁽⁹⁾、あるいは「オルテガなきあとのスペイン知性界をアラングーレン、フリアン・マリアスなどと共に常にリードしてきた人⁽³⁾」としている。

ライン・エントラルゴの著書は、『医者と患者』（英訳より重訳、絶版）、『スペイン一八九八年の世代』、「問題としてのスペイン」（『スペインの理念』¹⁰掲載）の三冊が邦訳されている。¹¹

三、ライン・エントラルゴの著書二、三の解説

私が持っているライン・エントラルゴの著書は、スペイン語で書かれた“Historia de la medicina”（『医学の歴史』¹²）（写真2）と、邦訳された『スペイン一八九八年の世代』、『スペインの理念』の三冊である。

『医学の歴史』は、まだ著者のライン・エントラルゴのことは知らなかったが、マドリッドの大書店カサ・デ・リブロの医史学のコーナーで、スペイン医史学の概要を知りたいと選んだ。A五判、本文七二二頁の書物であることが分

私が入手したのは一九九四年版だが、初版は一九七八年で、十回再版されている。広く読まれた書物であることが分

かる。欧米の医史学書では、GarrisonやCastiglioniのものがよく知られているが、この書はあまり知られていないと思うので、目次の概要を記載して紹介したい。序文・結語や、セクションの下の章は省略した。目次の丸括弧とその中は、原著者の記載である。

『ライン・エントラルゴ『医学の歴史』の内容』

第一部 技術前期の医学

第一セクション 原始病理学と原始医学

第二セクション 絶滅した古代文化

第三セクション 存続した古代文化

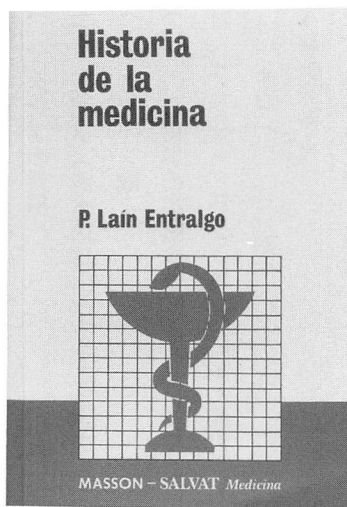


写真 2 ペドロ・ライン・エントラルゴ
『医学の歴史』

第二部 ギリシャの医学と“Physic” (古典古代)

第一セクション ギリシャ医学の起源

第二セクション 古典古代の医学知識

第三セクション 古典古代の医学実践

第三部 ヘレニズム時代、一神教および領主制社会 (中世)

第一セクション 古代世界の衰退と滅亡

第二セクション ビザンチン医学

第三セクション アラブ医学

第四セクション 中世ヨーロッパの医学

第四部 機械論、生氣論、経験論 (十五世紀—十八世紀)

第一セクション 宇宙の機械論的見方

第二セクション 宇宙の汎神論的見方

第三セクション 合理主義的経験論

第四セクション 合意と統合

第五セクション 医学の実践

第五部 進化論、実証主義、折衷主義 (十九世紀)

第一セクション 宇宙の科学的認識と技術的支配

第二セクション 人間の科学的認識

第三セクション 環境の科学的認識

第四セクション 医学の実践

第六部 現代の医学、影響力と困惑（第一次世界大戦以後）

第一セクション 宇宙の科学的認識と技術的支配

第二セクション 人間の科学的認識

第三セクション 環境の科学的認識

第四セクション 医学の実践

ライン・エントラルゴの医史学における関心が、史実だけでなく、その基礎となつた医学思想にもあることが理解されよう。

『スペイン一八九八年の世代』⁷⁾は、まず「一八九八年の世代」とは何かを説明したい。この年、スペインは米西戦争に敗れ、フィリピンやキューバなどの海外植民地を失つた。それは単に戦争に敗北しただけでなく、スペイン自身の精神的、政治的退廃の表れであつた。これに危機感を持つた知識人たち、ウナムノ、アソリン、バロッハ、アントニオ・マチャド、イン克蘭、ガニベット、マエストウらがこのグループを結成して、スペインの現状に警鐘を鳴らしたのである。⁸⁾私は詩人アントニオ・マチャドに関心を持つてゐるため、彼の詳しい経歴を知りたいとこの書を購入したが、歴史書でなく、むしろ思想書で、その点は期待に反した。

『スペインの理念』は、ライン・エントラルゴの「問題としてのスペイン」の他に、メネンデス・ピダル「二つのスペイン」、ガニベ（ガニベット）「スペインの理念」、「スペインの未来」を集めた書物である。

四、終わりに

私が、ライン・エントラルゴを紹介したいと思つたのには、二つの理由がある。

萬年甫氏は、ラモニ・カハールが神経解剖学の領域で画期的業績を上げながら、スペイン語で論文を書いていたために、ヨーロッパの学界に知られていなかったと述べている。「ピレネー山脈の向こうはアフリカだ」というナポレオンの言葉のように、かつてのヨーロッパではスペインが低く見られ、その文化も評価されなかった。医学史上も、イスラム・スペインの時代を除くと、ほとんど無視されてきた。名を知られたスペイン人の医学者というと、セルヴェトゥスとラモニ・カハールくらいであろう。

日本では、評価という前に、医学・医史学のスペイン語文献を入手するのが非常に難しい。私が以前、神経内科医の同僚と一緒に、神経内科学の古典的論文をスペイン語から訳したとき⁽¹⁾、日本の医学図書館には原文がなく、英国の関係機関の好意でようやく入手できた。また新大陸からヨーロッパへのキナ樹皮の渡来について検討したとき⁽²⁾、スペイン語で書かれた多くの研究があることを知りながら、それらを読むことができなかった。

しかし時代は明らかに変わった。アメリカではスペイン語を理解する人は少なくない（スペイン系文化が高く評価されているとは言い切れないが）。日本でも、私が昔スペイン語をかじり始めたころに比べると、スペイン語の学習機会も学習人口も飛躍的に増加した。わが国で、スペイン・中南米についての一般史やノンフィクションの出版も盛んである。こうした状況にに応じて、医史学も視野を広げるべきではないだろうか。

もう一つの理由は、ライン・エントラルゴが医史学者であると共に、指導的な知識人と評価されていることである。医史学はどちらかというとマイナーな学問とされ、社会的評価も必ずしも高いとはいえない。この中で、ライン・エントラルゴは、医史学者でありながらスペイン思想界の代表となっている。そのことを、日本の医史学研究者にもぜひ知って欲しかった。

参考文献

- (1) Lain Entralgo, P.: *Historia universal de la medicina* (『図説医学の歴史』) Barcelona, 1972-75
- (2) 泉彪之助「キナ樹皮渡来の伝説をめぐって、チンチョン伯爵夫人説とイエズス会説」『日本医史学雑誌』四三卷二号、一九九七
- (3) 清水憲男「ユマニストLain Entralgoと「う人」」『NHKラジオ・スペイン語講座テキスト』、一九八三年四月号
- (4) 萬年甫『脳の探求者 ラモニ・カハール』中公新書、一九九一
- (5) Lain Entralgo, P. y Albaraccin, A.: Santiago Ramon y Cajal, (『サンチアゴ・ラモニ・カハール』) Labat, Barcelona (出版年不明) (文献(4)より引用)
- (6) Lain Entralgo, P. y Teuton, A.: Nuestro (Ramon y) Cajal, (『われわれのカハール』) Madrid, 1967
- (7) P・ライン・エントラルゴ著、森西路代・村山光子・佐々木孝訳『スペイン一八九八年の世代』、れんが書房新社、一九八六
- (8) 佐竹謙一『浮気な国王フェリペ四世の宮廷生活』、二八二頁、岩波書店、二〇〇三
- (9) 林屋永吉ほか著『スペイン黄金時代』、一三四頁、日本放送出版協会、一九九二
- (10) メネンデス・ピダル、ガニベール、ライン・エントラルゴ著、橋本一郎／西澤龍生訳『スペインの理念』、新泉社、一九九一
- (11) 日外アソシエーツ編集部編『西洋人著名名レファレンス事典1、A-K』、日外アソシエーツ株式会社、一九九九
- (12) Lain Entralgo, P.: *Historia de la medicina* (『医学の歴史』) Ediciones Cientificas y Técnicas, S.A., Barcelona, 1994
- (13) 渡辺修『オルテガ』、二七―三九頁、清水書院、一九九六
- (14) Jakob, Ch. (1938) 著、泉 彪之助・藤田長久訳「視床下核への出血による交叉性舞踏病様片側バリズム」『神経内科』一 二卷一号、九〇―九五頁、一九八〇

(介護老人保健施設 陽翠の里)